

平成 26 年第 4 回定例会（内海猛年議員一般質問）

○議長 横尾 武志君

2 番、内海議員の一般質問を許します。内海議員。

○議員 2 番 内海 猛年君

2 番、内海でございます。

それでは通告書に基づきまして、一般質問をいたします。件名は26年度全国学力テストについてでございます。

文部科学省が本年4月22日に小学校6年生、そして中学校3年生を対象に実施しました、全国学力・学習状況調査、別名全国学力テストの結果が8月25日に公表されました。全国的な状況を見ますと、全国の平均と下位の都道府県といいますが、この差が縮まって、底上げがされているということと、もう一点は児童・生徒のアンケート、これ学習状況調査なんですけども、この中で平日に携帯電話、それからスマートフォンなどを長時間使用する子供については、成績が低い傾向にあるという調査結果が出ております。そこで、まず次の質問を行います。

第一点目として、芦屋町の小学校や中学生の学力は県内市町村や全国平均と比較してどのような数字になるのかお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

執行部の答弁を求めます。学校教育課長。

○学校教育課長 岡本 正美君

県内市町村ごとの平均正答率は公表していませんので、26年度の全国平均との比較でお答えします。小学校、3小学校の平均では、国語Aはマイナス2.5、国語Bはマイナス5.1、算数Aはマイナス1.1、算数Bはマイナス3.4となっています。中学校では、国語Aはマイナス0.4、国語Bはマイナス5.7、数学Aはマイナス3.4、数学Bはマイナス3.3となっています。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2 番 内海 猛年君

それでは今、調査結果が出ました。全国との平均ですけども、県との平均は出されていますでしょうか。どうぞ。

○議長 横尾 武志君

学校教育課長。

○学校教育課長 岡本 正美君

県との平均の数値ちょっと、差を出していませんので、数値をちょっと述べさせていただきます。26年度ですね。小学校の国語A、県が72、芦屋町が70.4となっています。それから国語B、県が54.4、

平成 26 年第 4 回定例会（内海猛年議員一般質問）

芦屋町が 50.4 です。それから算数 A、県が 77.7、芦屋町が 77.0。それから算数 B、県のほうが 57.4、芦屋町が 54.8 となっております。

それから中学校のほうになります。同じく 26 年度です。県が 78.4。国語 A、78.4、芦屋町が 79.0。それから国語 B、県が 49.6、町が 45.3。それから数学 A、県が 65.6、町が 64.0。数学 B、県が 57.8、町が 56.5 となっております。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2 番 内海 猛年君

ほとんどの科目でマイナスということが出ております。それで全国的に見ますと、福岡県の平均が全国 47 市町村で大体 38 番目。なおかつ福岡県の平均よりも芦屋町はマイナスが多いということです。これは当然、成績が悪いということになるかと思っています。

私たちは芦屋町の子供たちがどのような学力の状況になるのかというのをなかなか知る機会がありません。先日、私、芦屋小学校の公開授業を見させていただきました。ちょうど 5 年生の授業だったと思いますけど、算数の時間を拝見いたしましたら、先生の質問に対して子供たちがはきはきと答えておりました。すごいなあという感銘を受けたところでございます。しかし、今回このような結果を見て、大変驚いております。何でだろうかという。そこで、今あの学校では

——教育委員会のほうでは、小学校 4 年生までの 35 人学級、それからイブニングスタディ、芦屋型の小中一貫教育、キャリア教育など多彩な事業に取り組まれておられます。だけど、結果としては、ちょっと私も 24 年度から見てみますと、24 年、25 年、26 年、学力は逆に下がっているという状況が目に見えてまいりました。この状況について教育長はどのようにお考えかお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

今、議員ご指摘のとおり確かに下がっております。今一番、芦屋町の場合 23 年度がピークでございました。その時点のこと言っちゃしょうがないんですが、これなぜかというのは、はっきりいって私たちもよくわかりません。これだけいろいろ作戦を立てて、一生懸命やっているんですけども、ただ考えられるのは一つはやっぱり、学力が教員の努力とか教育委員会のいろいろな施策だけではなかなかそれが反映されていない。そうやって言うと逃げみたいになりますけれども、実態としてやはり家庭の教育力、学力が家庭とともにないと、どうしてもついていけない。学校でいろいろやっていることが家庭で定着されていないということがあられるわけですから、そういう言い方が一つ、1 点あるかと思えます。

いつも毎年、学力検証委員会で、学識経験者も入れた中で、実態を洗い出して、そしてどうやっていくか

平成 26 年第 4 回定例会（内海猛年議員一般質問）

対策をたてているわけでございますけれども、なかなかうまくいっていないというのが事実です。まあ若干上がったり、下がったりがあるわけでございますけれども、一つはそういう家庭とともにあるというのがそこが一つある。もう一つは先生方が異動して行きますので、へんな言い方ですが、せっかく育ったのがまた出て行くというようなこともあるし、そういうところが相乗的になってきたんだろうと思っておりますが、今それらのことを、原因をいろいろ言ったってしょうがございませんので、対策をどうするかということで今立ててやろうとしているところでございます。

以上です。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2 番 内海 猛年君

今回この結果を受けて、教育委員会の教育委員さん、ほかに 4 名おられますけれども、ほかの 4 名の教育委員さんの反応はなかなかなものでしょうか。お尋ねします。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

特に今年はですね、みんなびっくりしました。何よりも校長たちもびっくりしている。なぜかという、学校はしっかりもう一回分析せえってしていますけれども、分析はしているんですが、教育委員さんたちもやっぱり、これなぜかって言って、学力検証委員会の中には教育委員さんも入っているわけですが、これが一つ大きな原因だという原因をなかなか特定できないというのはきついなと思っていますけど。答弁になりませんが、教育委員も私も含めてショックは大きかった。

以上です。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2 番 内海 猛年君

原因がわからないということですが、これはいろいろな状況を検証しながら改善策を見つけるべきだと思っていますし、今のお話の中では家庭の家庭環境も一事あるのではなかろうかというお答えがありました。

次に 2 点目のほうに移らせていただきます。昨年 1 1 月に文部科学省が、方針を変更しまして、教育委員会の判断で学校別の成績を公表できるようになりました。芦屋町の場合インターネットでの公表がされておりますけれども、この要するに学校別の公表についてどうお考えなのかをお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

学校教育課長。

○学校教育課長 岡本 正美君

先ほども全国との比較で、3小学校の平均ということで、出させていただいておりますが、もともとこの公表につきましては、平成19年度から文科省の指導によりまして、文言で公表しなさいという指導がっております。その関係で芦屋町につきましても、ホームページで「やや上」とか「わずかに上」とかそういった表現でしてきているわけですが、国におきましても公表につきましては、都道府県別の平均正答率を公表しています。それから、県につきましては教育事務所ごとの平均正答率を公表している。市町村につきましては、先ほど言いましたように、文言で公表していますが、各学校ごとではなくですね、公表する場合においてはですね、小学校複数あれば平均で公表しているという形をとっています。

この公表において各学校のほうには通知が行きますが、教育委員会のほうにはそのあたりの情報は全く入ってきません。他町の小学校の成績はどうかということも入ってきませんので、比較のしようがないということで、ほかの町の公表を見ていただければわかると思いますが、先ほど言いました国語と算数、数学、このあたりのやや上回っているとかといった公表だけでございます。芦屋の場合はそれに加えて、学習状況調査の結果と学力のかかわりも含めて公表しているという状況でございます。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2番 内海 猛年君

25年度の学力テストの結果をホームページで公表してまして、私もこれ見させていただきました。先ほど学校教育課長がお答えされましたように、かなり上回っているとか、やや下回っているとか、なかなか判断に難しい。ややがどのくらいなのかかわからない。これを見ますとですね、プラス2.5、プラス2ポイントで大体、かなり上回っている。マイナス1.7、マイナス1.4ではほぼ同じである。マイナス1.3、マイナス1.3ではほぼ同じである。そういうような形でマイナスでもほぼ同じという表現がされています。

それで、先ほど教育長の答弁の中でも、やはり家庭環境、保護者の方がいかに子供たちに勉強の必要性を説くかということになれば、当然こういうふうなものも数値で表すことが、実態を掴める上での要素ではないかと思っています。こういうようにちょっと濁したような形で書けばなんのことだろうかという、なかなか危機感を感じないような状況になっています。ただ鳥取県のほうではですね、情報公開をすれば、学校別に出しますよということもちゃんとうたわれています。

それについて、この仮に序列化を防ぐということであれば、いろいろ問題があるかもわかりませんが、数値で表すということ、これはできないのでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

平成 26 年第 4 回定例会（内海猛年議員一般質問）

公表というのはですね、何のために公表するのか1点あると思います。私はやっぱり説明責任という意味で公表することはもう当然だと思っております。今、あの議員おっしゃいましたように、学校はですね、保護者宛、そして個人宛に、そしてそのとき保護者にそういう点数は全て出しておりますので、そういう意味では保護者に対する公表については学校が責任を持ってやっているというふうに思っています。ただ、私たちが例えば、何々小学校がどうだという、いわゆるナマテンといいますか、これを出すことについては先ほど課長が申しましたように、「文言で」という指導があっていましたから、それで従ってきたわけです。ただ、先ほど議員がおっしゃいましたように、今年から文科省が公表方法について変えましたよね。教育委員会のもとで各学校の得点を公表してもいいということになりました。これについては点数、いわゆるナマテンと言いますか、正答率という点数で出しているというのはですね、実は先日も郡内の小学校の校長会がありました。そのときに各学校どういう出し方をしているかと聞きましたら、やはり文言で出している。子供たちにはナマテンが行っていますから、保護者等についてはしっかりやっている。そういう説明がありました。

それから芦屋町でも各学校が学校便り、小学校は学校便り。それからこの間は10月の20日前後に土曜授業など使って保護者宛にこういう実態でございました、こういう取り組みをやりましたそういう実態とあわせて今後の取り組みについて説明して、保護者にはそういう意味での説明責任を果たしたというふうに私は捉えています。

以上です。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2番 内海 猛年君

保護者のほうには情報提供されているということでございますけども、やはり芦屋の子供は芦屋で育てるという文言がございます。地域を挙げて子供の見守り、学力向上を願うべきだと思っております。今回の公表については序列化という反対論もありますし、先ほど申し上げましたように、地域を挙げての学力向上に役立つという賛成論もあります。ただどもどちらがいいのかとなかなか難しいでしょうけども、できるだけきめ細かな情報提供をすることがやはり芦屋の子供は芦屋で育てるというモットーといたしますか、そういうものにつながるのではないかという思いがしておりますので、もう少しご検討のほうよろしくお願いたします。

それでは3点目に移らせていただきます。

先ほどより、学力が落ちているということを私は申し上げました。今後の学力を上げるための取り組みとして、どのようなことをお考えなのかお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

学校教育課長。

○学校教育課長 岡本 正美君

芦屋町学力向上検証委員会での意見も勘案して、各学校の実態に応じた学力向上策を実施することにしており、当面の目標として、小学校においては1月末実施のNRTテストで全国平均を超えることとしています。中学校の3年生はイブニングスタディにより、高校入試に向けて取り組んでいます。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2番 内海 猛年君

全国平均といいますか、そういうものを上回るということが出ています。25年度、24年度の芦屋の教育、これ見させていただきました。25年度ではA問題について5ポイント上げましょうと。それから26年度ではA問題について、またこれ3ポイント上げましょうとか目標があります。だけど、実態、先ほど岡本学校教育課長が冒頭に申し上げました、それぞれのA問題、B問題の開きを見ますと、大きいところで5点、マイナス5点ですね。上げるとすると8点も上げなければいけないと。大変厳しい状況です。目標を定めることはいいんでしょうけども、その目標に近づくように設定しないとイケない。

それでちょっと私が思ったのがですね、今の学校の中でよく私に相談があるのが、授業中に子供たちが後ろでいたずらしている。男の子が女の子にいたずらしている。だけど、教師が一生懸命黒板に向かって書いているから全く周りが見えていない、という状況も聞いています。私も1回学校に行ったことがあります。状況を見に。

それとある学校では確かに子供たちが「あいさんです。」とか手を挙げていますよね。ただこれが全ての子供たちがわかっているのかってというのがなかなか見えていない。逆にそういう声を聞くことによって全員わかってるんやなという判断をするため、あとそのわからない子供をその中のきめ細かな授業ができていないというのが実態ではないかと思っています。

特に教育長は「多忙感を充実感に」という言葉をよく言われます。第1問の質問の中でいろいろな取り組み35人学級、イブニングスタディ、それから県とか国の委嘱授業を受けていろいろな授業に取り組んでいますけども、果たして先生たちがゆとりある授業をされているのかな。きめ細かな授業をされているのかなという、そこをどうなのかなという思いがしております。それで、今後やる上では、やはりPDCAではありませんけども、やったことに対する検証をして、その中で改善点を見つけ、少しでも子供たちの学力を上げる。そういうふうな方策を立てるべきではないかと思っています。

今のお答えではもう全国テストに今、上がるようにしようとか、そういうような高校入試に通るようにしようとか、目的はいいんでしょうけど、やはり近づくよう、それに努力できるような目的、これが学校が一体となって取り組めるような目的が必要ではないかと思っておりますが、その点についてはいかがでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

今の授業中の態度の話、どこの学校かという感じもありますけども、確かに今年ある学校では1学期は大変荒れました。私も大変心配しましたが、大分今落ち着いてきたという実態だというふうに思っています。授業を静かに聞こうという学習規律をどう定めるかというのは非常に大事な話なんで、今年も各学校では、まずは心構え、身構え、もの構えという三つの構えをしっかりと。これは小中一貫でやっていますから、小中みんな共通してやりましょうということで動いています。確かに徹底したのかどうかという話になってくると、学級によって若干違いがあるかもわかりません。しかし、構えとしてはそういう構えでやっています、先生方がそういう中で子供たち一人一人が皆よくわかっているか、理解しているかという話でございますけど、これについてはですね、やはり40人学級と言いながら、35人学級にしておりますので、4年生までは実態としては30人前後のクラスです。その子供たち全員がどうだっとなってくると、これやっぱりいろいろなテストの結果を見てみますと、いわゆるわかっていない子がいるというのが事実でございます。この子供たちじゃあどうするかと。それがさっき申しましたようにそういう子供たちに家庭学習をしっかりとさせようと思って家庭学習の手引きだとか宿題を出すとかいう手立てを打っているんですけども、それがうまく機能していないのも事実でございます。あとはやっぱり学校としては補充的にですね、放課後残して、その子供たちを残して補充的にやるという取り出しみたいなものしか手がない。学校にとっては、それも今各学校では朝の取り組みそれから昼休みそれぞれやっておりますけども、それが定着するかどうかについては、学校でやっても昼休み20分とか、10分間の帯でとってるわけですね。それが定着するかどうかやっぱり家庭との連携、家庭も一緒になってやってもらわないと、これはなかなかうまくいかないという気がしております。

それともう一つ、いろいろなこと取り組みすぎるんじゃないかというお話でございますけども、私はこれ非常に微妙だと思っています。じゃあ、もう学校に全部任せてやんなさいという話でいいのかどうか。教育委員会としては私は三つの小学校の子供たちがいろいろな差ができることが非常に嫌だと思っています。というのは皆中学校に来るわけです。その中学校に来たときに、学力にしろ、学習規律にしろ、いろいろな面で生徒指導の面も含めてばらばらというのは非常に困るわけですから、ですから、みんな共通してある程度差を縮めていこうと。三つの小学校の格差をなくしていこうというのは私はずっと言っております。そのためにも、やはり共通して学力、いろいろな文科省など県の指定を受けて、町を挙げてやろうとそういった意味でやっております、先生方にとっては確かに忙しいかも知れませんが、毎年12月に先生方のアンケートをとっています。さわやかプロジェクトのアンケートという形で30項目以上のアンケート。その中で4点満点でとってまして、それに全員から無記名でもらっているわけです。それを見ますと3点、2点ごとが出ています。その中で議員のおっしゃった、「多忙感を充実感に」とそこにも入れています。多

平成 26 年第 4 回定例会（内海猛年議員一般質問）

忙感ですか、充実感ですかと。そうすると半分以上は充実感、4割は多忙感だと。特に新しく来られた先生方は忙しいばかりという話もありますけども、やっぱり私は、先生方は特に子供たちからわかったという言葉によって、多忙感が充実感にかわると思っていますので、これはやっぱりぜひ続けていきたいと思っています。

いろいろなことをやることで、確かに忙しいということがあるんですけども、そのことはまた一方では先生を育てている。我々は子供を育てないといけなし、最終的には人材を育てる、教員が育っていくことが大事ですから、そういう意味でやっておりまして、スクラップアンドビルドというのは非常に大事なことでございます。そこら十分頭の中に入れながら、施策を進めたいと思います。

以上です。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2番 内海 猛年君

教育長が言われますように、私も芦屋の小学校を出て水巻に転校された先生、ご存知です。それはそれでどうですか、芦屋と今の学校とどうですかとお尋ねしたところ、芦屋に帰りたいと言う人もおりました。充実した時間を過ごせるという、あるいい面はあるかもわかりません。ただ今言ったように、子供たちはどうしてもやっぱり学力が我々主になりますので、その辺を先生と同じ共通認識を持ちながら、教育委員会は教育委員会として進めていかなければいけないなという気がしております。我々が見れるのは、確かに子供たちの日常生活でもそうでしょうし、中学校3年生になって公立、まあいい高校に入れるような学力をつけることが大切ではないかと思っています。

最後の質問に移らせていただきます。

町長は26年度の施政方針で「教育力日本一」を目指すとされております。今回こういうような学力テストの結果、私としてはちょっと残念な結果ではないかという気がしておりますが、この結果を受けて町長のお考えをお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

町長。

○町長 波多野茂丸君

今まで内海議員、るる学力問題、教育問題についてご質問されたわけですが、議員が言われるように、施政方針演説で芦屋町教育力日本一を目指すという大きな目標、願望、やっていただきたいということのですね、思いを込めて施政方針させていただいたわけですが、それから、ICT教育、これを導入するということも言わせていただきましたが、非常に今回の結果、26年度の結果、私自身大きく落胆しておるのが現実であるわけでありまして。学力向上はやはり、学校教育の本当に重要な柱の一つであると私は思っております。ことに基礎的、これは基本的な知識、技能、これを習得し、今こういう難しい時代



平成 26 年第 4 回定例会（内海猛年議員一般質問）

ですので、それを力をつけて活用するという力が求められておるのではないかと考えております。

芦屋町の 26 年度の学力テストの結果は、全国及び福岡県レベルとの比較におきまして、教科ごとというよりも総合的に見ますと、全国平均、県平均ともに下回っておるというのが現実であるわけであります。一方、郡内に目を移しましても、やはり遠賀、まあ順位をつけると、強いてつけるとすれば、遠賀、岡垣、水巻と芦屋がちよぼちよぼということがこれは厳然たる事実であるわけであります。残念ながら、日本一がどうか、うんぬんするまでには至っていないということが、まさしく現実の状況であるわけであります。

芦屋町は教育費に関しましては、—— 25 年度決算では、ハード整備に関する経費を除く郡内の比較におきまして、児童生徒 1 人当たり支出額、芦屋町が 100 とするならば、水巻町は 80、岡垣町は 66、遠賀町は 60 となっています。このように本町では 35 人学級導入、小中一貫教育のための郡内他町に比べて多くの予算を認めているところです。これ以外でも現在 ICT 教育に関する調査の予算もつけて、来年度以降に反映すべく教育の向上には力を入れております。

現実には現実として捉え、まずは教育委員会でこの結果を十分に分析評価することが肝要だと思います。その上で、具体的な計画を学校ごとに策定し、実施することだと考えます。そしてまた、PDCA サイクルで毎年繰り返し、見直ししながら次のステップに踏み出すことが重要であります。このため、教育委員会からの報告を踏まえ、互いに共通認識を持った中で、学力の向上に努めていきたいと考える次第でございます。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

内海議員。

○議員 2 番 内海 猛年君

どうもありがとうございました。

以上をもちまして、私の一般質問を終わります。

○議長 横尾 武志君

以上で、内海議員の一般質問は終わりました。